様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：２５５０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０１０７３

研究課題名（和文）ピアサポーターの学修成果を測定するための多層的・構造的な評価システムの実践的構築

研究課題名（英文）Practical construction of a multi-layered and structural evaluation system for measuring learning outcomes of peer supporters

研究代表者
池田　史子（IKEDA, FUMIKO）

山口県立大学・国際文化学部・教授

研究者番号：１０２７５４３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ピアサポートによるライティング支援の現状と課題を明らかにし、学修成果測定のための評価システムを構築するために、支援者として関与する学生スタッフの意識に焦点を当てた。図書館職員の指導の下でピアサポート活動を行う大学院生と、ライティング授業の発展的活動として教員のコーディネートの下でピアサポート活動を行う大学生を対象として、インタビュー調査を行った。調査によって、ライティング支援の展開過程やピアサポーターの意識を探索的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
大学教育が多様化し学習の多層性が進むにつれて、正課外のピアサポートへの関心が高まり、実践事例も急激に増加している。しかしながら、正課教育の学修成果測定に比べて，正課外のピアサポートの学修成果を客観的に測定するシステムの構築は、未だ不十分である。そこで、ピアサポーターの変容プロセスを含めた学修成果や、学習コミュニティの展開と深化について明らかにする必要がある。本研究目的の達成によって、大学教育全体の学修成果を包括的に捉えることが可能となる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to establish a system for measuring learners’ outcomes by clarifying the current situation and problems in teaching academic writing using a system of peer support. For this purpose, the focus was put on the participants’ awareness in evaluating how their attitudes towards peer support have been changed. The interviews were conducted with graduate students engaged in peer support activities under the guidance of library staff and undergraduate students conducting peer support activities under the coordination of faculty as a developmental activity of a writing class. The survey provided an exploratory look at the process of developing writing support and the awareness of peer supporters.

研究分野：日本語学

キーワード：ピアサポート　ライティング支援　学修成果

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

大学教育が多様化し学習の多層性が進むにつれて，従来，生活支援を中心とすることが多かった学生支援が，学習分野へも支援領域を拡充し，変貌を遂げようとしている。学習支援の形態のなかでも特に，「報償のあるなしに関わらず，同じ学生（peer）同士が専門性を持つ教職員の指導（supervision）のもと，仲間同士で援助し，学び合う制度（プログラム）」（沖 2015）であるピアサポートへの関心が高まっている。日本学生支援機構の調査では，2013 年の時点で，国立大学の 80.0%，公立大学の 35.1%，私立大学の 43.6%がなんらかのピアサポートを実施しており，実践事例の急激な増加がみられる（日本学生支援機構 2014）。正課外の学習支援にも，正課教育だけでは達成できない「学生の人間的成長や大学の社会的機能を促進する」（川島 2010）教育的機能が期待されている。

ところで，近年，正課教育に関しては，各種答申や教育改革のための大型補助金等による政策的な誘導もあり，学位授与方針の達成度や科目ごとの学修成果を客観的に評価するための手法が開発されている。しかしながら，正課外の学習支援，なかでも実践事例が急激に増加しているピアサポートや，ピアサポートも含めた大学教育全体を包括的に捉える評価システムの構築は，未だ不十分であった。

２．研究の目的

本研究は，次の３点を主たる目的として開始した。

一つ目は，学習支援分野のピアサポートの事例分析を行うことである。我が国において急激に増加した学習支援分野のピアサポートについて，国内の大学に対して聞き取り調査を行うことで，支援領域，教職員や大学院生の介入の度合い，ピアサポーターの学修成果を評価するシステムの構築状況などについての現状を明らかにすることを目的とした。

二つ目は，事例分析を踏まえたピアサポートの実践を行うことである。文献調査や聞き取り調査等の結果を参考にしつつ，所属機関におけるピアサポート活動を改善し実践した。

三つ目は，ピアサポーターの変容プロセスを含めた学修成果や，学習コミュニティの展開と深化について明らかにするための多層的・構造的な評価システムを構築することを目的とした。

３．研究の方法

まず，ピアサポートに関する理論的背景や国内外の事例を整理するために，文献調査を行った。そして，学習支援分野のピアサポートを行っている先進的大学の事例を知るために，関東地方の大学に対して訪問調査を行った。また，学習支援やピアサポートに関するシンポジウムやワークショップに参加して，情報収集を行った。

次に，ライティング支援に関するワークショップを２回にわたり開催し，参加した大学教職員・学部生・大学院生とともに，ピアサポートの方法によるライティング支援の意義や課題を共有した。ワークショップや大学教育学会のポスター発表では，研究代表者の所属大学におけるピアサポート活動において，サポーターの自己評価や相互評価に使用した評価シートやルーブリックを公表した。

さらに，大学院生が図書館職員の指導の下でピアサポート活動を行うＡ大学と，大学生が学部専門科目としてのライティング授業の発展活動として，専任教員の指導の下でピアサポート活動を行うＢ大学について，ピアサポーターへのインタビュー調査を行った。

４．研究成果

（１）米国におけるライティング支援の展開と基本理念

日本におけるライティング支援は，20 世紀後半の米国における取り組みを参照しつつ展開されたことから，まず，米国におけるライティング支援の展開過程について，先行研究等を踏まえつつ整理した。

米国におけるライティング支援の歴史的展開については，西口（2019）に体系的に整理されている。西口（2019）によれば，米国の「アカデミック・ライティング」の起源は，19 世紀後期に遡るという。具体的には，第二次モリル法の制定（1890 年）により，農業従事者等の新たな階層に対する教育機会が開かれた。それによって，大学のカリキュラム改革が行われ，初年次ライティングが必修化されるという動向が存在していたことを指摘している。

また，日本において参照されることの多い米国のライティング支援の基礎が形成されたのは，20 世紀後半のことである。1970 年代には，米国の各大学がオープンアドミッション制度を導入し，高校卒業資格を持つ地域の高校生の受け入れを保証するようになると，伝統的な学生のみならず，多様な学生が大学に入学するようになる（西口 2019）。その結果，語彙や文法をはじめとした文章の形式を重視した指導は，結果として量的に実施不可能な水準に至り，次第に，学生を「自立した書き手」として育成しようという動向がみられるようになった（西口 2019）。

以上の経緯を踏まえれば，米国においては，大学で求められるライティングの水準と入学する学生のスキルにミスマッチが生じたことによって，度々，ライティング支援の重要性が強調されるようになったことが分かる。同時に，20 世紀後半においては，ライティングの目的が変容し，書くというプロセスを重視したライティングが展開されるようになったことも看取できる。

米国におけるライティング支援を担う重要な機関として，ライティング・センターが挙げられる。ライティング・センターは，当初は，リメディアル（治療的）教育の一環として，低学力者に対する対応を行っていたが，やがて，プロセスを重視するライティング支援の潮流の影響を受け，学生スタッフとの対話を通じて自立的な書き手となることを指導する場として発展を遂げた。そして，現在では，全米のほぼ全ての大学においてライティング・センターが設置されている（佐渡島 2014）。

こうした米国におけるライティング・センターにおいては，次の３点を基本的な理念として掲げ，支援が展開されている（佐渡島 2006）。第１に，分野を超えたライティングの指導を行うこと（Writing Across the Curriculum）が挙げられる。すなわち，ライティングというのは，様々な学問領域から独立した領域であり，「書くこと」の指導は，カリキュラムを横断して行なわれるべきであるという考え方である。第２に，「過程」としての「書くこと」の指導をすること（Writing as a Process）が挙げられる。これは，ライティングは，文章の構想段階から完成に至るまでの全体のプロセスを支援する必要があるという考え方である。第３に，自立した書き手を育てる指導を行うこと（Tutoring not Editing）が挙げられる。これは，ライティング支援の目的が，学生の作成してきた文章それ自体を添削によって良くすることにあるわけではなく，むしろ，プロセスを支援することを通じて，より良い書き手を育成するということである。

（２）日本におけるライティング支援の展開とその現状

日本でのライティング・センターの嚆矢は，2004 年の早稲田大学（2008 年度から全学展開），2008 年の金沢工業大学，津田塾大学などの取り組みである（吉田 2010，佐渡島・太田 2014）。さらに，GP 事業を通じて，関西大学をはじめとする複数の大学においてライティング・センターの設置やライティング支援の充実が図られている。

文部科学省高等教育局による調査を踏まえれば，ライティング・センターを設置する大学は大学数としては限られているものの，着実に増えていることが指摘できる。ライティング支援の取組みが定着を見せる一方で，組織的な取り組みへと歩を進めている。

なお，ライティング支援が定着を見せるなかで，その担い手について変化が見られるという指摘がなされている。ライティング支援は，元々は，正課の授業科目において，教員によって担われていたが，近年では，大学院生チューターなどの学生スタッフが雇用されるケースもある。さらには，大学院生だけでなく学部生が担うといった事例が広がりつつあることも指摘されている（外山・増地 2019，増地 2019）。こうした状況において，大学院生や学部生をいかにして支援者として育成していくかということが今後の課題となる。

（３）インタビュー調査と成果

大学院生が図書館職員の指導の下でピアサポート活動を行うＡ大学と，大学生が学部専門科目としてのライティング授業の発展活動として，学部専任教員の指導の下でピアサポート活動を行うＢ大学について，ピアサポーターへのインタビュー調査を行った。そこで得られた性質の異なる２大学のデータを計量テキスト分析することによって，学生スタッフたちが支援活動についてどのような意識を持っているのか，支援に対してどのようなやりがいや困難を抱えているのかといった課題を明らかにすることを目指した。

インタビュー調査は，2018 年１月から 2018 年３月にかけて，各大学のキャンパス内において行った。調査協力者の学生スタッフは，図書館職員や教員から紹介を受けたＡ大学の大学院生４名，Ｂ大学の大学院生１名・大学生５名であった。

合計 10 名の調査協力者を対象として，一人当たり 60 分程度の半構造化インタビューを行った。主な質問項目は，①活動期間と参加したきっかけ，②担当業務，③活動のなかで最も印象に残っている出来事，④活動のなかで心掛けたり自主的に行ったりしていること，⑤活動のなかで不安に感じることやその解消法，⑥活動のなかで誰かに助けを求めたり，頼ったりすることはあったか，⑦学内における評判，⑧活動の意義や自身への影響，⑨サポーターに求められる資質・能力，⑩改善すべきことであった。逐語録を作成し，KH Coder（Ver.3.Alpha.15h）を用いて計量テキスト分析した。

Ａ大学のインタビューにおいて最も多く出現する名詞は，「図書館」である。「図書館―職員」の指導の下で「図書館―ＴＡ」として，「デスク・カウンター」へ「相談」に「来る」学生たちの「学習（授業外学習も含む）―支援」を行っている。デスク，カウンターのような図書館関連用語が頻出し，それがピアサポーターたちの活動の場であることを示している。「図書館―職員」や「大学の先生」の「サポート」を行うことを，「業務」として捉えている。この「支援」の経験は，「実際―就職・就活」にも役立つと考えている。支援活動は，「業務」ではあるが，「アルバイトやサークル」とは性質が「違う」と思っている。「イベント」を通じて，「個人―交流」や「キャンパス―交流」が生じる。「イベント」で「意見」を言ったり，「反省」をしたりすることもあった。「自分」の「経験」を「話す」ことは，「自分」の「研究―活動」に「結構」良いこと

である。サポーターとして活動するためには，「スキル」が「必要」である。「本」の「利用」について，「分からない」ことは，「聞く」ようにしている。この「キャンパス」には，「理系」の学生が多い。新しい取り組みとして，「実験―レポート―書き方―講座」を行った。

Ｂ大学では，学部専門科目として，「文章」を「書く」ことの「授業」を受けた。授業のなかで，「レポート―書き方」の（支援）「活動」を行っていると「言って」いたので「知る」ことになった。「自分」が「ライティング」の支援集団として，「人」に「教える」とは（その時は思ってもいなかった）。「留学生」に対しても，「個別―相談」や「ミニ講座」において，指導を行った。また，「前期」に「リーダー」を務めたことが「印象」に「残って」いる。人前で「話す―機会」は，「緊張」する「経験」だった。そういう時は，「先輩」に「話」を「聞い」てもらった。「今」でも，「不安」に思うことが「多い」。「学年」の「違う」学生と交流することは，（不安に思うことが多かった）。「担当」の時に「困った」ことは，「他」に「伝える」べきことが「伝わる」ように心掛けたり，「後輩」に「気づい」てもらえるように「考え」たりすることだった。「大学―教員」や「相手」のことを「考える」ようになった。

大規模大学において図書館職員の指導の下，大学院生がピアサポーターを務めるＡ大学と，小規模大学において学部専門科目の発展活動として専任教員がコーディネートするＢ大学には，大きな違いが確認された。Ａ大学においては，図書館職員を意識しつつ，業務としての認識の下で活動している姿が，Ｂ大学においては，サポーター相互の関係性を意識しつつ，「教える」ことに不安を抱えながら活動に従事している姿が浮かび上がってきた。他方で，両大学に共通する点として，ピアサポート活動を通じて，異なる他者（異なる専門領域・異なる世代）と交流することを通じて，学生スタッフ自身が学び合う場（学びの共同体）を形成していることが挙げられる。さらに，ピアサポート活動を推進するにあたっては，「『ライティング支援』を支援する」教職員の役割が重要であることも改めて明らかになった。各学生スタッフの発言の背後にある個別の文脈性をより丹念に拾い上げながら分析を深めていくことが，今後の課題である。こうした分析を積み重ねつつ，「『ライティング支援』を支援する」教職員のありかた，活動の評価を行うことによってピアサポーターたちのやりがいを向上する方法，そしてその評価方法について考察を進めていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 池田史子，橋場論	４．巻 13
２．論文標題 ピア・サポートによるライティング支援の現状と課題	５．発行年 2020年
３．雑誌名 山口県立大学学術情報	６．最初と最後の頁 33-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 橋場論・池田史子
２．発表標題 ピア・サポートによるライティング支援の現状と課題～対話を通じて今後を展望する～
３．学会等名 九州大学次世代型大学教育開発拠点　ライティング支援ワークショップ
４．発表年 2019年

１．発表者名 池田史子
２．発表標題 大学生による大学生のための文章作成支援活動は上級生サポーターに何をもたらしているか？
３．学会等名 大学教育学会2017年度課題研究集会
４．発表年 2017年

１．発表者名 池田史子・橋場論
２．発表標題 ピア・サポートによるライティング支援の現状と課題～対話を通じて今後を展望する～
３．学会等名 九州大学次世代型大学教育開発拠点　ライティング支援ワークショップ
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	川島　啓二 (KAWASHIMA KEIJI) (50224770)	京都産業大学・共通教育推進機構・教授 (34304)	
研究分担者	橋場　論 (HASHIBA RON) (50549516)	福岡大学・教育開発推進機構・准教授 (37111)	